

～広報常陸大宮150号記念～

150か月の歩み

平成16年10月16日に合併し、常陸大宮市としてスタートして13年。広報常陸大宮の第1号が発行されてから今月で150号を迎えました。この記念号では、創刊から現在までの歩みを振り返り、今まで紙面を作成してきた担当者からの声をお届けします。



歴代広報担当者がつづける

平成16～17年（海老澤）

常陸大宮市が誕生して最初の担当だったので、お互いの地域を身近に感じてもらえるよう、毎号必ず、旧5町村のニュースを掲載することにしました。私自身初めての場所も多く、不安もありながら、いろいろな場所取材に行きました。その結果、集めた情報が多すぎて、どれを掲載するかとても悩んだことを思い出します。



平成17～19年（武藤）

何を表紙にしようか…。毎号頭を痛めていました。また、表紙に使えるような写真が撮れるかどうか常にプレッシャーでした。しかし反面、良い写真が撮れたと思った時の安堵感とうれしさはひとしおです。毎号構成に悩み、毎週末取材に走り、毎月メ切に追われるこの仕事ですが、取材を通じて多くの方との出会いがあり、大切な財産になったと思っています。



平成19～20年（加倉井）

毎号悩んでいたのが表紙の写真。この出来事を表紙にするぞと気合いを入れ取材に出かけますが、見返すと思うような写真が撮れず悩む日々でした。その中でも表紙にした写真（平成19年5月号）。女性消防団の発足式ということもあり団員の方も緊張いっばい様子でしたが、凛々しい姿を納めることができた1枚です。



平成20～23年（内田）

最初の大仕事は、初登庁する三次市長の写真を撮ることでした。写真は表紙にも使用することになっていたため、失敗は許されません。前夜はほとんど眠れず臨んだことを今でもよく覚えています。当日は不安な気持ちの中、取材慣れた新聞記者に圧倒されながら、慣れていない一眼レフのシャッターを何度も切りました。平成20年5月号の表紙を見ると、あの日の緊張感がよみがえります。



平成23～25年（神長）

担当時代は写真撮影に苦労しました。経験が少ない上、広報のカメラは一眼レフ。私で務まるか不安でした。取材に向く時は緊張し、どこから撮ればいいのかイメージできず、大勢の人の前に出ていくことに抵抗がありました。そんな中、取材先の方や地域の皆さんの優しさに触れるうちに楽しくなり、今では写真を撮ることが好きになりました。



平成25年～担当（立原）

現在、過渡期にある（と思われる）広報紙。「お知らせするだけではなく、市のPRの先頭に立ち、SNSを駆使し、紙とITを融合させた広報戦略を…」と考え出すと、何から手を付けていいかわからなくなります。それでも、読みやすい紙面をと心がけてきた初心を忘れずに、これからも広報紙と向き合っていきたいと思っています。

